

---

# 象牙

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

象牙

### 【Nコード】

N8939P

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

未来の話。象牙は手に入れたいが象の命を奪ってしまう。それに対する解決策とは。未来では本当にこうなるかも知れません。

## 第一章

### 象牙

未来の話だ。文明は発達していた。それに伴い科学技術もだ。その技術は生物学にも及んでいた。動物、とりわけ家畜の品種改良はさらに進み肉も卵もミルクもさらに多く、しかも良質のものが手に入るようになった。

人はそれを文明の勝利と喜んだ。そしてその中で繁栄を謳歌していた。

繁栄すれば贅沢を求めるようになる。人の習性が辿り着かせることの一つだ。人々は華やかなもので自分達や家を飾るようになった。そしてだ。

その中には宝石もあった。やはりこれも科学技術の発展で人口にしろ多くの宝石が手に入るようになった。しかしであった。

宝石にも色々ある。中には象牙もある。その象牙はだ。象牙の牙だ。つまり象から手に入れる。しかしであった。

ここで所謂動物愛護団体や環境保護団体だ。言い出したのである。

「象を殺すな！」

「絶滅しそうなんだぞ！」

「生物の環境を守れ！」

この時代でも彼等は健在だった。しかもこの主張は正論だった。

「象牙なんかいらんない！」

「象を守れ！」

「虐殺を許すな！」

過激であるが確かに象もまた生きており自分達の欲望で殺すといふのはよくないことだった。これはかなり大きな論争になった。

しかしである。象牙愛好家達にとっては迷惑な話だった。彼等の多くは資産家である。その力を使おうとしたが無駄だった。

密漁をすれば厳しく監視をしている保護団体に本気で攻撃された。何とそれにより実際に殺される者がいるから驚きだ。

尚且つ保護団体は政治力を使って圧力をかける。資産家達にとってはマスコミやネットまで敵に回して散々な状況になった。

だがそれでもだ。彼等は諦めない。それだった。

「何とか手に入れられないか」

「象牙をだ」

「どうしても手に入れたい」

こうある場所で密談していた。

「シベリアでマンモスでも発掘するか？」

「もう掘り尽くしたぞ」

「既にな」

マンモスの牙はもう駄目だった。そしてだ。

「こうなったら象を家畜にしてそこから取るか？」

「ああ、いいな」

「それはな」

これについてはまずはよしとなった。ところが。

「しかしそれでも象を殺すな」

「象牙を取るからにはな」

「そうなるな」

このことも話された。

「そうなったら結局動物保護団体が騒ぐぞ」

「殺すからか」

「それでか」

「それでだ」

まさにそれによってだった。

「結局同じか？」

「そうなるか？」

「家畜にしても」

「やっぱりそうなるか」

彼等は頂垂れることになった。家畜にしても殺すのならやはり問題になる。実際この時代では牛や豚を人間が食べる為に家畜として飼い殺すのはどうかという議論も起こっていた。食べるという人が生きる為の行為についてもこうだ。それでは嗜好品を手に入れる為に象を殺すならば。最早論外だった。

「じゃあどうする？」

「打つ手なしか？」

「もう象牙を諦めるか？」

「こんなことが話されだした。

「象牙がなくても生きてられる」

「だからな」

「諦めるか」

「仕方ないか」

諦めかけた。しかしここでだ。

ハインツ＝プライ博士がいた。生物学の権威である。その彼がだ。こんなことを言い出したのである。

「つまり象牙を象を殺さずに手に入れられて」

まずはそこから話す。

「そして何度も手に入れられたらどうでしょうか」

「それだと流石に誰からも文句は出ないでしょうね」

「そうでしょうな」

これについては誰もそうだと聞いた。

「しかしそれはどうやって？」

「どうやってできるのですか？」

「考えがあります」

博士はこう述べた。

## 第二章

「鹿の角と同じ要領で。象を品種改良します」

「とうとう象牙が幾らでも生えるように」

「そうするのですね」

「はい」

まさにその通りだと。博士は答えた。

「そうします。どうぞでしょうか」

「それができるのですか」

「実際に」

「やるうと思わなければ何もできません」

博士の返答は実に前向きなものだった。まさにその通りだ。

「ですから」

「やってみるのですね」

「最初に」

「そうします。お任せ下さい」

博士は胸を張って同志達に述べた。

「必ずや。象を殺さずに何度も象牙を手に入れられるようにしてみます」

彼もまた象牙愛好家であった。それならば余計にだった。博士はその象を殺さずに象牙を何度も手に入れる方法をだ。研究に移したのである。

研究は難航した。しかしであった。

彼は何とかそれに成功した。実際に象をのその牙をだ。何度も取れるようにしてみせた。

「まさかと思いましたが」

「やりましたね」

「実際に」

「はい、鹿の角のあれを応用しました」

やはりそれだというのがのである。

「それでなのです」

「では角と同じくですか」

「切っても何度も生える」

「そういうことですね」

「はい」

博士は胸を張って答えた。

「その通りです」

「素晴らしい、それでは」

「これからは象を殺さずに」

「象牙を手に入れられますな」

これは喜ぶべきことであつた。彼等にとつてはだ。

この技術は早速実用に移され実際に品種改良され象牙が幾らでも生える象が家畜化された。こうして象を殺さずとも象牙が手に入るようになった。

博士はその象牙の指輪を見ながらだ。満足している顔で同志達に話した。

「いいものですね」

「はい、やはり象牙は奇麗です」

「美しいものです」

象牙を愛する者達は彼の言葉に笑顔で応えた。

「これまで象牙を手に入れるには象を殺さなければなりませんでしたが」

「それで後ろめたかつたし批判も受けてきました」

彼等とても気にせずにはいられなかつた。人間には良心があるからだ。中にはそれがない者もいるにはいるが大抵はある。

「しかしこれからは」

「はい、象を殺さずに手に入ります」

「実にいい」

「最高の結末です」

「その通りです」

ここで博士も話した。

「私も自分のこの研究が成功して何よりです」

「そうですね。他の動物にも応用できそうですし」

「これはいい」

「誰も困らないし死なない」

「得をすることはかりです」

彼等はこう言い合い喜び合う。しかしであった。

象達はだ。何度も何度も牙を取られる。鋸やそういったもので切られてそれを使われるのだ。伸びればそのそばから切られていく。

その為に家畜として飼われている。その彼等は言うのだった。

「何度も何度も」

「ああ、牙を取られてな」

「嫌だよな」

「全く」

こうその象牙用の象の牧場で話していた。そこは広い草原でかなり頑丈な鉄やコンクリートの覆いで囲まれている。象の巨体とパワ―を意識しての覆いであることは間違いない。高く厚い。それは刑務所以上だった。

### 第三章

その中の草原でだ。彼等は話すのだった。

「何度も何度も牙取られてな」

「痛くはないけれどね」

「それでも。伸びたそのそばから取られるし」

「鬱陶しいよね」

「そうだよね」

それで嫌なのだった。牙を切られるのがだ。

「何でこんなのが欲しいのかね、人間ってのは」

「そこがわからないよね」

「本当にね」

象達にはわからないことだった。しかし実際に何度も取られていく。それが鬱陶しくて仕方がないということなのである。

「取られるこっちはたまったものじゃないよ」

「幾ら痛くないからって」

「それでもだよ」

こつ言い合う。牙には痛覚がない。そうした意味でも鹿の角と同じだ。その辺りも博士はしっかりと考えて遺伝子操作をしたのである。

「嫌だよね」

「牙取られなかったらいいのに」

「そうだよ」

「だから取るなっていうんだ」

しかし彼等の言葉は人間達には届かない。博士はこの時牧場に来ていた。そしてそのうえで牧場の管理人と話していた。

「いやあ、よかったですよ」

「そうですね」

太って茶色の顎鬚を生やしたその管理人が博士に言葉を返す。

「こうして。象を殺さずに象牙を手に入れられるようになって」

「象も喜んでいてしょうね」

博士はこうも言った。

「殺されずに済んで」

「そこまで考えて動かれたのですね」

「はい」

博士はにこやかに笑って管理人の言葉に頷いた。

「その通りです。本当に成功して何よりです」

「博士のお陰で多くの象達が救われました」

管理人の言葉は明らかに博士を褒め称えるものだった。

「こうしてです」

「そうであれば何よりです」

博士はいささか謙遜して言葉を返した。

「象達が助かれば」

「そのうえで象牙が手に入る」

「本当に誰もが得をすることです」

博士はそう確信していた。

「成功して何よりです」

「全くですね」

幸か不幸か彼等は人間であり象の言葉はわからなかった。だが象達は言っていた。しかし彼等が殺されることはなくなったのは事実である。そして人間のエゴが残っているのもだ。それも事実だった。

象牙 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8939p/>

---

象牙

2011年1月2日21時25分発行